

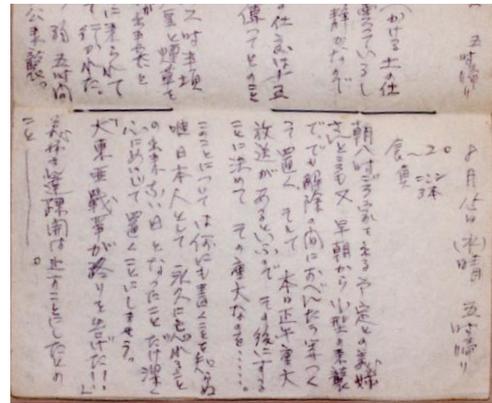
## 日野の歴史と民俗135

### 終戦と日野 一主婦の日記から

昭和20年(1945)8月15日、太平洋戦争は終結し、それから66年の月日が流れました。

小西六写真工業(コニカミノルタ)や、日野重工業

(日野自動車工業)などの大工場はあったものの、市域の大部分が農村であった日野は、都心部から比べれば、食糧事情にも少し余裕がありました。19年8月から始まった東京都の学童集団疎開では、氷川国民学校(港区立赤坂小学校)と大井第一国民学校(品川区立大井第一小学校)の児童を受け入れました。19年秋からは、航空機工場の分散・疎開・地下移設等が行なわれ、新築途中であった日野国民学校(日野第一小学校)が中島飛行機に徴用、20年2月からは三沢地区には地下工場が掘削され、多くの朝鮮人労働者が動員されました。



日野市域への空襲は4回ありましたが、20年4月4日未明、上田・宮・下河原方面を襲った空襲では小学生を含む28人、8月2日には日野重工業付近で2人が亡くなっています。

日野町在住の主婦桑原ぎんさん(当時24歳)は詳細な日記をつけられていて、その内容は当時の日野を知る貴重な記録となっています。昭和20年に入ると日々の記録にも、日本の戦況や敵機来襲の記事が増えて、状況が逼迫して来た様子がうかがえます。

6月13日の日記には「沖繩の戦況いよいよ重大の報を聞き、やりきれない思ひにかられながらの毎日。こうして骨を折れば、思ひ通りの食糧も手に入る私達はまだまだ余裕のあるわけだ。」と記されています。沖繩の戦況のことはたびたび日記に登場し、いよいよ本土決戦かという不安な思ひがうかがえます。また、防空壕掘りや、食糧増産のため夫婦で畑仕事に精を出したり、米の代替として配給される豆やトウモロコシを何とか美味しく食べようと工夫する様子などもうかがえます。

8月に入ると「ああ、昨夜のあれが一生の一番苦しい思ひ出になるくらいなら幸せだけれど、まだまだもっと苦しい悲しいことが起き・・・」(2日)と、八王子大空襲にショックを受けた様子がうかがえ、被災した知人の世話で八王子へ行き「初めて見た焼爆の跡、なんたる非人情なことをする敵かと今更ながらフンガイの涙が落ちる」(9日)と記しています。

このようにして迎えた終戦の日は早朝より小型機が飛来、義姉の疎開の手伝いを午後に変更して重大放送を聞いたとあります。ぎんさんは、「日本人として永久に忘れることのできない日となった」と記し、一際大きな字で「大東亜戦争が終わりを告げた!」と記しています。この日の配給は鰯が3本でした。

翌16日の日記には「昨日からの日本はこれまでとまったく異なった日本になったのだ。」と記し、敗戦の衝撃を乗り越えようとする決心がうかがえます。その後は、防空壕から着物を出したり、トマトの買い出しに行ったりと、空襲の無い生活にほっとする様子がうかがえますが、「敵軍の進駐もいよいよ26日頃から第1次部隊がこの辺にもくるとのこと」(23日)、「配給物は不調だしなんとなく不安でならぬ」(25日)と、どうなるかわからないこれからの生活に、不安を感じている様子もうかがえます。

9月2日には「今日降伏文書調印式行なはる、午後7時からの重大報道は主人と共につつしんで聴く」とありますが、パーマメントをあてようと美容院をさがしたり、帰省する切符を求めて奔走したりと、日記からは戦時下ではない生活に戻っていかうとする心の張り合いが感じさせられます。ただし、いずれもうまくはゆかず、帰省も延期となります。

10月には「進駐軍がその寮へも入るので一寸いやな気持、一日も早くこんな不安な気持ちが取れて、心から親しめるような間柄になれるといいけれど」(3日)と記しています。11月に入って、ようやく汽車の切符が手に入り帰省、父母兄弟との久しぶりの再会を喜びました。その後も、停電・断水・食糧の不足など、たくさんの困難に直面しながら「クウシュウの無いミソカ」(12月31日)を迎え、多くの日本人がそうであったように、復興への第一歩を踏み出そうとしています。

(日野市郷土資料館 北村澄江)